

平成29年度 東村山市立東村山第二中学校 学校評価報告書

学校教育目標

○自ら学び考え行動する人になろう【自主】 ○心身を鍛え健康な人になろう【健康】 ○広く他を思いやる人になろう【豊かな心】

目指す学校像(ビジョン)

【目指す学校像】

○生徒が様々な場面で自主的に行動し、達成感や充実感を得ることのできる学校 ○自尊心や自己肯定感を高めながら、生徒の可能性を最大限に伸ばすことができる学校 ○保護者や地域社会の期待に応え、生徒と教師の信頼関係が築ける学校

【目指す児童・生徒像】

○目標に向かって自主的に学び、積極的に行動できる生徒 ○自分を大切にするとともに、他の人を尊重する具体的な行動ができる生徒 ○広い視野から多面的・多角的に考え、自分の役割や責任を果たすことができる生徒
○心身ともに健康で自分の可能性に挑戦できる生徒 ○集団や社会の一員として自覚し、地域に貢献できる生徒

【目指す教師像】

○自尊心や自己肯定感を高めながら、生徒の可能性を最大限に伸ばすことができる教師

前年度までの学校経営上の成果と課題

【成果】①本市研究奨励校として2年間、「自尊感情や自己肯定感を高める教育活動の工夫」を組織的に取り組むことで、教員一人一人の授業力を高めることができた。②生徒、教職員の地域行事への参加、ボランティア活動への参加を積極的に行い地域との連携推進を図ることができた。

【課題】①「特別の教科 道徳」に関する研修とともに先行実施する。②授業改善とともに家庭学習の習慣を身に付け、学習内容の定着を図る。③学校不適応生徒が学校復帰できるように指導や支援を行う。④保護者や地域との連携協働を積極的に進め、生徒の健全育成を図る。

	具体的方策	第1回評価		課題と対策	第2回評価		課題と次年度以降の対策
		努力目標	成果目標		努力目標	成果目標	
学力向上	・毎授業の目標や学習内容の明確化 ・ユニバーサルデザインの視点に立った学習環境の整備 ・生徒の実態に応じた授業改善	3.0	3.5	・毎授業の目標や学習内容の明確化については、細かく示す教員とそうでない教員がいたが、概ねできていた。 ・生徒の実態に応じた授業改善では、デジタル教科書などを使用するで環境にはなっておらず、ICT機器が活用できない。	3.2	3.0	①授業のねらい及び学習活動の流れを明確に示すとともに、見通しを立てたり、学習の振り返りができる授業を展開することで、学びに向かう力を促す。 ②「東京ベーシック・ドリル」や「東村山市版数学基礎ドリル」を活用するなど教材を工夫し、個に応じた指導を充実する。
	・話し合い活動等、生徒が主体となる学習活動 ・指導と評価の一体化と評価評定の説明責任	3.0	2.8	・平成27.28年度の研究成果を継続し、話し合い活動を積極的に取り入れている。一方、グループ編成によっては、一部の生徒の意見や考えに流され、話し合いが深まらないことが課題である。人数編成や発表方法を工夫し、課題を改善する。	3.5	3.3	③各教科等では、少人数での「話し合い活動」を取り入れた授業の推進し、論理的思考力・判断力・表現力等をはじめとする言語能力を向上する。 ④生徒のよい点や進歩の状況を評価し、評価計画や評価基準の改善・見直しを行う。また、教員相互の授業公開を年2回以上実施し、授業力を向上させる。
健全育成	・生徒の自治的な活動の充実 ・SSWなど関係諸機関等と連携し、学校不適応生徒や家庭の支援 ・「特別の教科 道徳」の先行実施	3.2	3.0	・学校行事や学年行事を通して、生徒の充実感・達成感を高めることができた。その結果を日頃の学校生活に役立てることが課題である。また、今年度から3学期制となり、行事予定の見直しが課題である。	3.0	3.0	①望ましい集団活動や体験的活動を通して、「集団や社会の一員としての自覚」、「自尊感情や自己有用感を高める」等の指導を充実させる。 ②「特別の教科 道徳」の趣旨を理解し、一部先行実施することで、生徒一人一人に道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。
	・年3回のいじめに関するアンケートや生徒観察等で早期発見、早期対応する。 ・「さくらシート」による、生徒の支援 ・家庭や地域との連携と協働体制づくり	3.0	3.2	・4/1-6/30までのいじめ認知件数は、19件でその多くは「冷やかしかりからかい、悪口」である。相手の気持ちを考えた言葉の遣い方の指導とともに、いじめに対する組織的対応を徹底する。	3.2	3.0	③学校いじめ対策委員会を定期的に開催し、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、教員サポーター等との連携を密に図る。 ④困難な事態や強い心理的負担などのストレスの対応方法や自殺予防に向けたSOSの出し方に関する教育を年間指導計画に位置付ける。
健康・体力づくり	・アレルギー疾患や感染症に関する校内研修の実施 ・日本の食文化の理解と食生活の改善	3.0	3.0	・年度当初に全生徒の健康状況を共通理解したり、アレルギー対応としてエピペン使用の校内研修会を行った。 ・食育については、家庭科等で指導しているが、全体指導や学級指導の設定が課題である。対策としては、年間指導計画に位置づける。	3.5	3.5	①食物アレルギー生徒を全教職員で共通理解し、学校において発症した際のアナフィラキシーショックの対応及び連絡体制を整備し、組織的な対応を図る。 ②家庭科の授業を中心に「食育全体計画や食育年間指導計画」を活用し、食文化や心身の健康の理解を通して、食に関する指導を推進する。
	・オリ・パラ教育の充実と国際理解の推進 ・体育行事の充実と発展	3.0	3.5	・運動会の開会式では、聖火入場を行うなど、オリ・パラ大会を意識した取り組みをしている。また、体育実技種目についても、オリ・パラ種目と関連した授業内容にしている。さらに、国際理解教育が課題である。	3.3	3.5	③オリンピック・パラリンピック教育を推進することにより、日本の伝統と文化を尊重する態度を育成するとともに、国際理解や障害者理解を図る。 ④体力テストの調査結果から運動する楽しさを実感できるよう体育の授業だけでなく、運動に親しむ習慣や体力を養う学校全体の体育活動を一層推進する。
保護者・地域との連携	・定期的な学校だより等の発行 ・ホームページを週2回以上更新 ・学校だよりの600部配布(各町内自治会へ)	2.5	3.0	・本校のホームページについては、容量が少なく、更新も学校でなければできない環境となっており、定期的に更新することはできなかった。しかし、学校だより「若樹」だけでなく、今年度から「校長室だより」を発行し、教育情報を積極的に発信している。	3.0	3.2	①特色ある教育活動や土曜授業を年9回公開し、本校の教育活動の理解を図る。また、学校公開時には、生徒の学習成果を積極的に公開する。 ②本校の教育活動への理解及び生徒の成長を実感してもらうため、学校ホームページ等を活用し、教育情報を発信する。
	・ボランティア部を中心とした地域行事への参加 ・教員の計画的なPTA活動や青少対等への参加	2.7	2.5	・ボランティアへの参加については、約6割の生徒が経験している。やってみたいが、部活動などもあり、参加できない生徒がいることが課題である。 ・教員の地域活動への参加では、若手を中心に活動している。	3.0	3.0	③生徒と一緒に教職員も青少年対策第二地区委員会や自治会等の活動に参加することで、学校教育を理解していただくとともに、地域社会の一員としての役割を果たす。
特色ある学校づくり	・1年生全員への理解啓発授業 ・特別支援コーディネーターを中心とした校内委員会での組織的な対応	3.5	3.5	・今年度は、8組担任が1年の各学級で啓発授業を行った。また、8組の生徒がその能力に応じて、通常学級の体育授業に参加したり、通常学級の生徒とともにマラソン大会にも参加し、好成績をあげた。 ・校内委員会は、「配慮を要する生徒」と「不登校生徒」に分けて、組織的に対応した。	3.5	3.3	①特別支援学級(八組)と通常の学級との交流及び共同学習を意図的・計画的に行うとともに、第1学年全生徒を対象に各担任が理解啓発授業を行う。 ②各学年の情報を共有し、個別指導及び教員サポーターによる学習支援及び情報交換を積極的に行いながら、特別支援教育の充実を図る。
	・学校生活の中で生徒一人一人が自分の役割や責任を果たす場面の設定	3.5	3.8	・生徒会活動のスローガンを「自主・自律」とし、各委員会活動では委員長がリーダーシップを発揮することができた。生徒アンケートでは、「責任感を強くもち、自主的に取り組んだ」と90.1%の生徒が肯定的に回答した。	3.5	3.5	③学級活動や生徒会活動、学校行事、部活動等を通して、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する。 ④地域社会に貢献できる中学生を育成する観点から、大きな災害が発生した場合の中学生の役割について検討する。